
story of wishes and collapse ～願いと崩壊の物語～

ミカツキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

story of wishes and collapse
～願いと崩壊の物語～

【Nコード】

N1347W

【作者名】

ミカヅキ

【あらすじ】

大空に浮かぶ大陸。

大陸にて起こる戦争。

戦争に『兵器』として巻き込まれた2人の幼き姉妹。

幼き姉妹の姉は願う。

……誰か、わたしの本当の『願い』を思い出させて。

そして……、この物語の『崩壊』した元凶を、教えて。

第一話（前書き）

＊注意

グロイ描写があります。赤いのが出てきます

第一話

ザンッ！

紅く染まった大地にて、剣を振るう少女が一人。

その少女の瞳に……

映ルモノハ無い

story of wishes and collapse
願いと崩壊の物語

第一話 『紅』

紅い、紅い、紅い、アカイ。

周りの状況を表す文字を何度も繰り返してみる。

……はつきり言って、気が狂ってしまおう。

いや、簡単に人を斬れるようになってしまった頃から、もう狂っているのだろう。

そんなことを思いながら、その紅い『人だったモノ』を踏みつぶして帰路をたどり始める。

……帰路をたどる途中、ふと想う。

『こんな日々を繰り返し始めたのは、何年前からだっただろうか』

ひい、ふう、みい……。

指を折ったり、広げたりして数える。

その結果、残ったのは人指し指と中指。つまり2本。

つまり、2年目。

「早いなあ、もう二年になるんですね」

ぼろっと、口から零れたのはそんな言葉。

「……早かったのか遅かったのか、今の『狂ったわたし』には分かんなくなってしまうけど」

次いで零れたのは、自嘲のような薄っぺったい言葉。

ガサツ……

後ろから、物音が聞こえた。

それが何の音かは、2年間『こんな事』をやってるわたしはわかってしまう。

十中八九、わたしの姿を見てついてきたところでしくじって物音を立ててしまったのだろう。

……仕方がない。

ザグッ！

物音が聞こえた方へ一瞬で距離を詰め、手に持つ血塗れの剣を振るう。

するとあまり聞きたくないグロテスクな音をたてて、そこにいた人物の首がとんだ。

…本当は見えていなかったけど、感覚でわかった。

首があったところから吹き出す紅い飛沫になるべく当たらないようにしながらその場を去る。

ほんの少し残った、罪悪感に苦しみながら。

第一話（後書き）

はい、なにか訳の分からない始めとなりました。

今回出てきた人物の名前などは、次回明らかなになる予定です。

世界観・設定（前書き）

これは随時更新していきます。

ところどころおかしい部分もありますが、そこは温かい目で見えていただきたいと思います。

世界観・設定

●設定

・舞台

『バルフェニティ』と呼ばれる、空に浮いている大陸にある『ルナヴィアース』という国。

その国は大規模な軍隊を所有しており、他国へ侵略して領地を増やしている。いわゆる侵略国家。

『バルフェニティ』が何故空に浮かんでいるのか、そして大陸の下に何があるかは解明されていない。

・世界観

この大陸（または世界）には、『絶対王政の国』や『社会主義の国』や『資本主義の国』などのさまざまな国が存在している。

各国は表面上友好な関係を築いているが、水面下では戦争になりかねない危険な状態。

だが、『ルナヴィアース国』が他国へ侵略を開始したことが引き金となり、各地で戦争が勃発。今では大陸全体で戦いが繰り広げられている。

『バルフェニティ』にある全ての国に魔法は存在するが、科学技術は発達していない。

つまりは『剣と魔法のファンタジーの世界』である。

だが最近、『ルナヴィアース国』内で「動く鉄の塊（機械）」が目

撃されているらしい。

・魔法について

この世界での主な魔法は、

『人間の中にある魔力を呪文や魔方陣などで引き出し、自らの意思で発動する』

というものである。

ゲームなどで見られる

『自然に満ちている魔力などをかりて魔法を発動する』

『既に魔力が宿っているモノ（魔石など）から魔力を引き出して発動する』

というものは、この世界ではかなり難易度の高い魔法に分類されており、扱う者は数少ない。

また、この世界で魔法を使う者を『魔法使い』ではなく『魔導師』と呼ぶ。

魔法の階級は『初級魔法』、『低位魔法』、『中位魔法』、『高位魔法』、『最高位魔法』の5つ。

『初級魔法』が一番威力が低く、『最高位魔法』が一番威力が高い。

人間に宿る魔力には『属性』というものがある。

生まれつきで宿るものもあれば、努力や修行などで宿ることもある。

『属性』にあった魔法は使いやすいが、正反対の『属性』をもつ魔法は扱いづらい。

ちなみに、人間に宿る属性に上限はない。いくつでも属性が宿ることは可能である。

属性一覧（現時点）

・炎、水、風、地

かなり多くの人々に宿る属性。

多くの魔法の基礎に必ず組み込まれている。

生まれつきのほかに、修行などで宿らせることも可能。

世界を構成している属性でもある。

・光、闇

人口の4分の1ぐらいの割合で宿る属性。

かなり強力な威力を持つ……が、それは正しい（特別な）使い方をした場合のみ。

基本的には上の4つと大差ない。

・聖、暗

人口の2分の1ぐらいの割合で宿る属性。

特徴は、攻撃が出来ないかわりに治癒などの回復魔法を扱えること。

・神の13属性

かなり特殊な属性。詳細は不明。

神話によると『世界の全てに打ち勝ち、終焉をも乗り越える力を持つ』。

この世界の13の人間にだけ生まれつきで宿り、宿っている人間が死んだ場合はすぐに別の人物へ宿るらしい。

現在発見されたもの：『天空の制裁』、『精霊の泉』、『聖なる光』、『万能の力』

・地名

『ルナヴィアース国』

各地で侵略活動をして領地を増やしている国。本作の主な舞台。

『バルフェニティ』の中ではかなり裕福な国。

理由は農産物や海産物、鉱山資源などに恵まれているため。

また魔法の研究が盛んであり、そういった技術面では各国を凌ぐ。

『サンデルカ国』

数年前、ルナヴィアース国の隣にあった国家。

現在はルナヴィアース国に侵略され何もない領地となっている。

国民がどうなったかは不明。噂では全員殺されたと言われている。

●登場人物

・フラル

種族 人間

性別 女

年齢 一話 10歳

誕生日 9月18日

星座 おとめ座

一人称 わたし

二人称 ーさん・キミ・貴方・貴女

容姿 黒髪に黒い瞳、任務によって服装は変わるが、必ず背中に両手剣、『マジックバースト』を背負っている。

幼くして、ルナヴィアース（国家）軍の『特殊攻撃部隊』（略して『特功部隊』）に所属している少女。本作主人公。

性格は軍人らしく他人に冷たくふるまっているが、本来は傷つきやすい優しい心を持つ。

だが、精神的に壊れてしまっている部分があり、暗い歌を一人で紡いでいたり、戦闘中に大声で笑いだしたり、攻撃時に味方を巻き添えにしたりなどのおかしな行動をする。

戦場では、大の大人でも扱うことができない高位魔法をいくつも同時に放ったり、両手剣を片手で振り回すなど幼いながらもかなりの実力がある。

また、何故か味方であるはずの軍人たちを拒絶している。

・ライカルⅡバイグロア

種族 人間

性別 男

年齢 1話 26歳

一人称 俺

二人称 お前、てめえ、貴様

容姿 ボサボサの茶髪に茶色い瞳、ラフな服にマントを付けたものを着て、常に腰に2本の刀を差している

ルナヴィアース軍の『特功部隊』に所属している二刀流の『魔導剣士』。得物は二本の刀。

フラルの上司でもある人物で、性格は荒いが見えないところでの氣遣いなどをするいい人。

フラルのおかしな行動などを見て彼女を気にかけているが、否定されてしまうためどうすればいいかを考え中。

戦場では敵陣の中に突っ込んで、風を纏わせた二本の刀ですべて壊滅させることから『魔双刀の暴風^{ザキ}』という二つ名で知られている。

第二話前編

……人の手により荒れ果てた大地。

虚ろな視線で見つめる少女は、

一体、何ヲ想ウ？

story of wishes and collapse
願いと崩壊の物語

第二話前編 『物語り』

あの場所から立ち去り、いつもと同じ道をたどると城下町に着く。
城下町の名前は、『ルナヴィアース』。この国と同じ名前だ。

……ちなみに、この城下町の中心に建っている青白い外壁で覆われ

た巨大な城の名前も『ルナヴィアース』だ。

城下町はそろそろ夕暮れということもあって、人が多い上に騒がしい。

だけど、服や剣のあちらこちらに返り血が付いたわたしの姿を見ても反応しない人がほとんど。当たり前だ、この城下町は『国のために戦う』兵士がよく訪れる。そして訪れる兵士のほとんどは血まみれ。

よくそんな兵士を見るから慣れてしまった、ということなんだろう、きつと。

……もつとも、わたしは『国のために戦う』わけじゃないけれど。

人ごみの中をすり抜け、表通りからいくつも伸びる路地に入って裏通りへ。

いくつもの細い路地を歩いた後、一つの行き止まりの壁の前で立ち止まる。

行き止まりの壁には、特に何も変わった部分はない。地面近くにまるで鍵穴のような穴が開いている事以外は。

わたしは屈みこんで、その穴に懷から取り出した小さく折りたたんだ紙を入れる。……数十秒後、小さい、だけどよく通る低い声がわたしの耳に届いた。

「……天より舞い降りしものは」

今日は「その」合言葉ですか。

「『人類への希望、それと表裏を成す絶望』」

「神々の手に堕ちし……、モノは」

「『神へ抗う権利、力』」

「世界、の……分岐点は」

「『未来への可能性と選択肢の数だけ存在する』」

「……。転生……を繰り返す、者は」

「『やがてその身に宿る灯を消し、底知れね無に還されるだろう』」

「……………」

あれ、ちょっと。まだ合言葉は続くはずだ。なんでそこで黙る。と
いうか、さっきから変なところで区切れてる。

……もしかして、合言葉を忘れた？

「……………やべえ、この先忘れた」

ぼそっと呟いた声が聞こえる。

やっぱりか馬鹿野郎。貴方はそれでもわたしの上司ですか。

……話し出す気配も思い出す気配も無し。仕方がないか。
自分でこの先を紡ごう。

「何者でも止められないものは『始まりと終わりの崩壊』。

輝きを失った人間が描くものは『永遠擬きの夢物語』。

やがて、自らで紡ぎし夢物語に取り込まれ『己の存在を見失う』」

「……。やがて、象有るものは崩れ」

やっと思い出したか。こんな人が番人をやっていて良いのだろうか。

「『象無きものは忘却の彼方に流される』」

「己の解答は」

「回答は、『たとえ我が心を殺してでも』」

「あ、なんだよ『フラル』じゃねえか」

最後の合言葉……。いや、それぞれを識別する言葉の羅列を並べると、壁の向こう側からまるで『拍子抜け』とでもいうような声が聞こえる。

ちなみに、『フラル』というのはわたしの名前だ。

「……合言葉、忘れていたじゃないですか」

「あー……悪い悪い」

「『悪い』じゃないです。早く開けてください」

「相変わらずだな、フラル」

少し間を開けて、目の前の壁がまるで硝子ガラスのように透ける。壁に向かってぶつかることもいとわずに歩き、透けた部分に体が触れると、

まわりの景色が行き止まりの通路から洞窟のような場所に変わった。

第二話 後編（前書き）

かなり遅くなりました

そしてところどころ中二病全開という（↑

第二話 後編

洞窟のような場所にいたのは、茶髪に茶色い瞳、ラフな服にマントを付けたものを着て、腰に計2本の刀を差した男。

名前は『ライカルⅡバイグロア』。わたしの上司にあたる人物。

「任務はどうだったんだ？」

洞窟のような場所——いや、本部への地下道？——を進みながら、唐突に聞かれた。

「……南の五番基地は殺り終わりました」

「うわ…、下手すると俺より成果上げてんじゃねえか」

「貴方はどっちかというと単独ではなく複数で任務を受け持ちますからね」

「まあ、そう言われちゃそうだけどな」

今言った通り、だいたいこの人が受け持つ任務は複数というか部隊ごと。

その仕事の多くは、

『戦場へ行ってなるべく多く敵勢力の数を減らす』というもの。

つまり、使い捨ての、相手の駒の数を減らすだけの、駒。

……彼と比べて、わたしは単独任務を受け持つことが多い。

単独任務の内容は、一人で敵地に忍び込んで相手方の情報などを手にしたり、重要なモノをとってきたりすること。もちろん、たった一人で敵の基地を壊滅させたりすることも、単独任務の中にある。…だから、優秀な人材は軍の幹部に重宝されて単独任務を受け持つ。ちなみに、わたしの今回の任務は後者の内容だ。

「おい、フラル着いたぞ。今日も賭けをやるのか？」

考え事をしていたら、いつの間にか着いていたらしい。

着いた場所は、少し薄暗い人が多い酒場。

ここではよく、軍人たちがトランプなどを使って金貨などを賭けて楽しんでいる。

わたしもたまに賭けをやることもある。だから「今日『も』やるのか」と聞いたのだろう。

…どうせ、明日はやることがないから、いいよね。

「そうですね、やりますか。…貴方はどうするんです？」

「俺は…、今日『アイツ』がいるから、遠慮しておく」

一応、ライカルもやるのかと確認をとるが、今日は（人間関係ではなく、賭けの勝ち負けの方で）苦手な人物がいるらしく遠慮した。

そのままの流れで別れを告げ、適当に空いてるテーブルに座りトランプを切る。

しばらくすると、真っ赤な紅を唇に塗り毒々しい服を着た女と、口元の髭が印象的な男と、安っぽい葉巻を銜えた若い男の計三人が同

じテーブルに座った。

わたしが一番年下（多分）なので、切っていたトランプを中央に置いて尋ねる。

「賭け、何に致しましょう？」

一瞬、わたしのあまりにも丁寧すぎる口調に殺気のこもった眼差しを受けるが、そんな生ぬるい視線に怯えるほど、わたしは弱くない。

「……賭け、何に致しましょう？」

もう一度尋ねる。

先ほどの視線にこもっていたものとは比べ物にならないほどの殺気と、「何度も言わせるな」という怒気をこめて。

「それじゃ、ポーカーにしないかい？」

もともと空気が読めるのだろう、若い男が一番無難な遊戯^{ゲーム}を挙げる。

わたしが頷くと、直ぐ様男と女がテーブルに置いたトランプに手を伸ばす。多分、自分がシャッフルして配るときにイカサマをしやすいようにだろう。

だが、二人がトランプに触れる前に若い男が手にして、シャッフルし始めた。

「一回ずつ、交代で配りましょう」

という言葉と一緒に。

若い男が言った言葉に無言で頷く二人。

……ここで『此方にカードを渡せ』等をしつこく言う事は、『自分はイカサマをする』と言っているようなものだ。
だから、二人も食い下がったのだろう。

配られたカードを見て、思った。

「……貴女、またですか」

何回か繰り返したころ、わたしは毒々しい服を着た女に言った。

「『また?』……あんた、アタシより勝ってる癖になに言ってる?」

今のところ、一番稼いでいるのは意外にも若い男で、二番目に髭の男、三番目はわたし。僅差で彼女が下になっている。

「…今日もうまくいていないみたいですし、止めたらどうです?」

「はあ? あんたなに言ってるの?」

……まさか、あんたに負けてるアタシがイカサマでもしてるって言うの？」

……うん、今のカオでわかった。

「ええ、そうですよ。

袖からカードが丸見えですから」

次の瞬間、いつの間にか移動していた男が彼女の後ろに回って、手首を捻り上げる。

彼女の手首から、今使っているトランプよりも遥かに多いカードが床に散らばり、隣のテーブルで賭けをやっていた人々が騒然とこちらを見る。

落ちているカードはキングやジャックなどの強いものばかり。

イカサマがバレた女はかなり憎々しげな表情をわたしに向けて、酒場の管理者と複数の大柄な男に連れていかれた。

「ふっ、はははははっ！」

連れて行かれる女を見送りつつテーブルのカードを集めようとしたとき、髭を生やした男が笑い始めた。

「くははははっ！……嬢ちゃんおもしれえじゃねえか」

「……、何が面白いんですか？」

「その目だよその目！……よくあの女のカードを見破ったな」

「……御冗談を。貴方の方が先にわかっていたんじゃないのですか？」

「クククッ……、嬢ちゃんこそ先にわかってたんじゃないのか？」

鎌をかけたつもりが、さらに鎌をかけられた。

……そうくるなら、

『そうですか？』

……そう思うなら、貴方の懐から見えるそのスペードのキングもバレてると思った方がいいですよ』

音を出さずに唇の動きだけで、その真実を叩きつける。

しばらくの間、鋭い針のような緊張が満ちた沈黙が続く。
話に入れない安っぽい葉巻を銜えた男が何かを話そうとしたとき、
その沈黙はとけた。

パン！

この場にはあまりにも不釣り合いな銃の発砲音——銃声——と共に。

銃を発砲したのは男。

多分自慢のイカサマがバレた事がショックだった上に、管理者に通報されるのが恐ろしかったんだろう。

この酒場で『管理者に通報される』というのは、『二度と酒場に入れない』ことを意味している。

賭けを日常的にやる人々にとって『賭けが出来ない』というのは、ものすごい苦痛だろう。

……もつとも、

「『手を出したり銃を発砲したりした時点で通報される』という事に気付けないのは愚かしいですけど、ね」

キーン！

甲高い音がした、と思った瞬間にテーブルのど真ん中に何が突き刺さる。

……それは先端部が尖っている小さな鉛の弾。
つまりは、男がわたしに向けて撃った銃弾。

今度は、さっきよりも広い範囲で騒然となった。

銃声もそうだけど、銃弾がテーブルの真ん中に突き刺さったことに
対して。

でも、一番驚いていたのは拳銃にしては少し大きい、鈍色の銃を私
に向けた男だった。

「その銃は『00型』ダブルオートタイプですね？」

……しかもその銃身でありながらも遠距離射撃に適している『0
0型遠距離量産銃』ダブルオートタイプスケープコピースリール」

「あ、ああ……」

わたしの言葉に男は、まるで魂が抜けたような顔をしてうなづく。

「……甘いですよ？」

『00型遠距離量産銃』ダブルオートタイプスケープコピースリールから発射される銃弾は飛距離が伸びれば
伸びるほど威力が増す型です。タイプさすがにその銃身なので150?も
すれば威力は落ち始めますが。

……逆に言えば、その型は至近距離の射撃に向いていません。至
近距離では威力が一般の拳銃に少し劣りますからね。……それでも、
貴方が今狙った心臓などの急所に打ち込めば死は免れないでしょう
けど」

一応、懇切丁寧に説明してみる。

意味のないことだとは知っているけど。

「じゃ、じゃあ……」

説明を受けてなのか、わたしより年上であるはずの男が若干怯えた様子で口を開く。

「じゃあ、お前は一体どうやって銃弾を防いだ!？」

「初級風魔法『ウィンドーム』」

ウィンドーム
初級風魔法は周囲の風を凝縮し、その塊を対象へ放つ魔法。
それで、銃弾がテーブルの上に落ちるように放ちました。

「は、はあ!？なに言ってるんだ、お前詠唱は……」

「していませんよ？」

……もしかして貴方、詠唱がないと魔法が使えないと思っ
ています?」

残念ですね、魔力がある程度あれば無詠唱でも魔法の使用は可能
なんですよ。

そこまで説明し終えると、先程イカサマをした女を連れて行った奴
らと同じような体格の男が数名来て髭を生やした男を連れて行った。

ふっ、とまわりを見る。

葉巻を銜えた男は、すでに手に入れた金貨すら持たずにいなくなっていた。

そして、まわりの人はもうこちらに興味がないようで、すでに賭けに戻っていた。

仕方ないからテーブルに残った金貨を懐に入れていたとき、この場にいる事があまりにも不自然な幼い少女が目に入る。

白いワンピースに少し長い黒髪。そして慣れた手つきで襟やら袖やらからイカサマのカードを引き抜く。

……本当に不自然だ。

でもわたしは彼女を知っている。

彼女は『国家兵器部隊』所属の、『裏切り殺しの使者^{アレス}』。通称『アレス』。

「キミも、こんなになっちゃったんだね」

私の嘆きは、誰にも、彼女にさえも、届かない。

第二話 後編（後書き）

はい、フラグが立ちまくってます

次回は……今年中に投稿できればいいな……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1347w/>

story of wishes and collapse ～願いと崩壊の物語～

2011年10月30日22時12分発行